

精神文化学会 第12回 学術大会

日時:令和4(2022)年9月11日(日)13:00開場

会場:キャンパスプラザ京都 2 階第1会議室

大会テーマ「道徳論」

- 13:15-13:25 第13回総会 司会 庶務幹事 海老名宜陽
13:30-13:35 開会挨拶 理事 岡田晋亮
13:35-14:00 基調発題 会長 近藤 剛
14:05-15:55 研究発表 第一部(道徳論) 司会 幹事 上野 洋
16:05-16:45 研究発表 第二部(自由枠) 司会 筆頭幹事 仙波義規
16:45-16:50 閉会挨拶 専務理事 徳田季晋

発表プログラム

基調発題

13:35-14:00 近藤 剛(京都産業大学文化学部 教授)

「歴史の産物としての道徳—自然権への懐疑—」

要旨:ひとまず、道徳を歴史的に蓄積されてきた慣習としての習律、あるいは価値(求めるべき理想)と規範(守るべき現実)の観念体系と定義しておくならば、現下の日本社会は反道徳に落ちてしまっている。すなわち、歴史的叡智である伝統からは乖離し、歴史的持続に対する愛着は欠如し、国民精神は非歴史化されてしまっている。こうした状況をもたらした原因の一つとして、人権主義イデオロギーの毒性を指摘することができる。本発題では、その思想的背景を17世紀の自然権思想、また18世紀のフランス革命に遡って批判的に考察する。その上で、道徳は歴史の産物として捉えられるべきこと、また道徳の機能は対立する諸価値間の平衡を図ることにあることを論じたい。

研究発表 第一部

14:05-14:25 仙波義規(八尾支援学校高等部 教諭)

「和俗童子訓から見る教師の役割—予する教育とは—」

要旨:貝原益軒は『和俗童子訓』の序文で「赤ん坊は人生のはじまりである。この時は誰もみな性質が似ている。誰もまだものを習っていない。理性や思考もまだ起こっていないが、その善をなし悪をなすわかれ道はここにある(中略)だから人を教えるのには、早くから教えることを急がねばならない。」と言う。『和俗童子訓』の論点は多岐に渡るが、本論文では、和俗童子訓総論上の一番始めに語られる「予め(早くから)教える」ということを取り上げて、益軒の教育思想や教師の役割を考えていきたい。

14:25-14:45 森 一郎(元神戸市立学校 教諭)

「人間の力を超えたものに対する畏敬の念」の授業化の試み
—中学校道徳科での場合—

要旨:本発表では、現在の道徳科において教えることが最も難しいとされてきた「人間の力を超えたものに対する畏敬の念」に着目し、学校現場での実践に資するため、追試可能な授業案を提示するものである。そこで本発表では、最初に「人間の力を超えたもの」とは具体的に何なのか、「畏敬の念」とは何に対する畏敬なのかを明らかにする。そして以上の内容を踏まえて、道徳科において「畏敬の念」の授業化を進めるうえでの要点を明らかにし、さらに授業案、教材なども提案し、実践に資するための授業プランを提示する。なお本発表では、「人間の力を超えたもの」や「畏敬の念」などの表現は、やや宗教的な意味も含まれると思われる点から、児童・生徒の理解力や認識力などの発達段階を考慮して、中学生を対象とする。

14:45-15:05 永松道晴(株式会社インテグレート 代表取締役社長)

「日本を愛したカンドウ師の道徳論から今日の世界と日本を語る」

要旨:フランスのバスク地域に生まれたカンドウ師(Sauveur Candau 1897 生)は、カソリックの神父として第二次大戦前と戦後に日本の地で宣教しつつ、人間の自由と平和を旨とする道徳は、宗教や文化の違い問わず万国共通の基礎の上にあることを、教育や著作・講演活動を通じて訴え続け、1955 年東京で客死した。カンドウ師は、宗教者であり、教師であり、学者であり、生活文化の異なる国に生活しつつ、そこに通底している道徳観を良く理解していた点で、新渡戸稲造の生涯と重なっている。カンドウ師の著作「バスクの星」の内容に沿って彼の道徳観を紹介する。道徳と規範は、日本、西欧キリスト教国、それ以外の諸国によって異なり、その違いが戦争か平和かの分岐点になっている。第一次、第二次両大戦に従軍したカンドウ師は、平和には“秩序の静けさ”が欠かせないと身をもって経験しており、彼のこの指摘が 70 年後の今日に警告として当てはまっていることを考えたい。

15:15-15:35 溝浦健児(自営業)

「道徳と普遍的価値」

要旨:昨今、道徳心の欠如が叫ばれており、様々な社会問題を引き起こしている。社会のありとあらゆる場所、学校教育の現場から立法府の議場へと至るまで、目を覆いたくなるような惨状が広がっている。そもそも、道徳とは何であろうか。世間や社会における、個々人が守るべき規範であり、倫理や修身という言葉に置き換える事もできるだろう。上記は必ずしも、明文化された法律などではなく、歴史や伝統によって培われた、不文律である場合も多い。道徳には必ず価値判断、より正確に述べらるなら、善悪や正邪の判断が伴う。価値判断が伴う以上、必ず意見や理念の対立が起こるであろう事は、想像に難くない。ある共同体では是とされる事が、別の共同体では否とされる事例は枚挙にいとまがないであろう。国家、民族、宗教、社会階層などによる、違いはもちろんあるであろうが、しかし筆者は、時代や地域を超えた、普遍的な共通善は必ず存在するという立場をとる。

15:35-15:55 能村晋平（愛知県庁学事振興課 主事）

「新しい道徳と日本の道徳—ポリコレと日本人」

要旨：ポリティカル・コレクトネスはアメリカ合衆国で狂気を巻き起こしている。コロナ禍で起きたジョージ・フロイド事件では BLM 運動は最高潮に達し、本来の目的を大きく逸脱した暴力と略奪の狂宴に姿を変えた。ポリティカル・コレクトネスは我が国にも少なからず影響を与えているが、実際はこの道徳的な正しさを隠れ蓑とし、我が国の伝統や文化を破壊し、「国がら」を否定するための道具として用いられている。コロナ禍は我が国の道徳の低下を浮き彫りにした。他者の気持ちを顧みない身勝手な正義が暴走したり、給付金をだまし取ったり、混乱に乗じての金儲けに精を出したりと浅ましい人々の姿が眼についている。こうした中で、私は日本という国が代々受け継いできた「国がら」に注目し、日本人の道徳を考察すべきであると考え。同時にこれはポリティカル・コレクトネスの観点からは受け入れられないことである。よって、このような教育は「家庭」で行うべきである。

研究発表 第二部

16:05-16:25 海老名宜陽（同志社大学 職員）

「墮落と更生の可能性について—創作物の悪役を手がかりに—」

要旨：善く生きたいという願いは誰もが持っているものだろう。だが、それを実現できる人はどれほどいるだろうか。善を希求しながら、それに到達することができず、却って悪に甘んじてしまうような現象を本稿では墮落として捉え、墮落した人が再び善を目指せるようになるまでの、更生の道筋を明らかにしたい。そのためにまず、悪の概念について整理をする。そして悪を体現する人物像として、創作物に描かれる悪役を取り上げる。悪役の分析を通じて、墮落が生じる経緯を確認する。その後、墮落を経てなお善に回帰するという、とある悪役を取り上げ、その背景に描かれた物語を分析し、更生に至る道筋を明らかにしたい。

16:25-16:45 本常瑞己（関西学院大学大学院文学研究科 大学院生）

「80 年代アメリカから現代社会における普通とは何か
—「ささやかだけれど、役にたつこと」を通して—」

要旨：本論では、1983 年にアメリカで出版されたレイモンド・カーヴァー（1938-1988）の短編集『大聖堂』より、「ささやかだけれど、役にたつこと」を取り上げ、「普通」というものを通して、登場人物の実存がどのように希薄化していくのか、あるいは回復されていくのかを読み解いていきます。また、1980 年代のレーガン政権下におけるアメリカの状況をとりあげ、物語に見られる登場人物の社会的背景を読み解きます。主に、裕福な家庭を持ち、専門的なスキルをもつ高給管理職に属する労働者と、低賃金なサービス産業に携わる労働者を対比し、前者に降りかかる悲劇の根底に後者の悲壮感が流れている構造を軸に、互いに埋まらない溝をこえてどのように関心をもち関わり合っていくのかを探ります。最後に結論としてカーヴァーの文学が貧困層の労働者を取り上げたことの価値の重要性を再認識し、その価値が現代社会においては、アメリカという国や地域を超えて普遍的、あるいは殊更に重要になっていることを、現代の道徳観の迷走を示しながら論じます。